

題目 二者間での信頼行動の示し方が第三者に及ぼす影響に関する研究-依存度選択型囚人のジレンマゲームを用いて-

氏名 河村崇正

指導教官 高橋伸幸

信頼関係や信頼の重要性は社会科学や心理学において認識され、心理学における信頼研究に関するその研究の多くが囚人のジレンマを用いて行われてきた。しかし、囚人のジレンマを用いた実験においては、信頼行動と協力行動が、概念的にも方法的にも明確に区別されてこなかったという問題点が指摘されてきた。囚人のジレンマが抱える問題点を解消する方法として、信頼行動の研究には囚人のジレンマゲームではなく、信頼ゲームを用いるべきだと主張したのが清成・山岸（1999）や Krep（1990）であった。しかし、このゲームは一方通行の信頼行動についてのみ測定するものであり、二者間の相互的な信頼関係を扱うには適していないという点や、1 回限りの静的なゲームであるため、信頼関係の形成に関する研究には適していないといった点で、このゲームにも問題が存在していた。松田・山岸(2001)は、囚人のジレンマや信頼ゲームの問題点を指摘し、その問題点を解決する新たな研究を行った。この研究では、相互協力関係と信頼関係の概念的区別を明確化し、両者を分離して測定するために依存度選択型囚人のジレンマゲームを用い、相互協力関係と信頼関係との関連を明らかにすることを目的としていた。この研究は、信頼行動と協力行動の概念的区別を明確にし、両者を分離して測定することで信頼行動と協力行動の関係を明らかにした重要な意義を持っていたが、依存度選択型囚人のジレンマゲームの当事者である、ペアを組んだ二者間における信頼行動と協力行動にしか焦点が当てられていないという事実が存在する。しかし、実際の社会では常に潜在的な取引相手としての第三者の目が存在しており、信頼行動を示すことが第三者によって高く評価され適応となる可能性が存在している。本研究の目的は、依存度選択型囚人のジレンマゲームにおける信頼行動が、信頼を示した当事者だけではなく、そのやり取りを見ていた第三者からどのような評価を受けるのか検討することにある。本研究ではインターネットアンケートツールである、Qualtrics を用いて質問紙を作成し、調査を行った。最初は信頼の度合いが低く、徐々に信頼の度合いを高めていく信頼行動のパターンと、最初から大きな信頼度合いを示す行動のパターンのという 2 パターンの信頼行動に対する第三者からの評価がどのように異なるのか、過去に参加した依存度選択型囚人のジレンマゲームにおいて取引相手を裏切って非協力行動をとった割合が高い人物と低い人物という 2 パターンの人物に対して信頼行動をとった際の第三者からの評価がどのように異なるのかを検討した。その結果、全体として裏切り率の効果はほとんど見られなかったが、徐々に信頼の度合いを高めていく人物よりも、最初から一気に大きな信頼度合いを示す人物の方が、第三者から相互作用の相手として選びたいと思われることが示された。